
僕は君で 君は僕で？

celestial

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は君で 君は僕で？

【Nコード】

N0156I

【作者名】

celestial

【あらすじ】

春休み最後の日。たまたま天気良かったから、ただそれだけの理由だったはずのたわいもない散歩。しかしそれは、偶然なのか必然なのか、僕は出会ってしまった。僕の学園生活を一変させる、僕と全く同じ容姿を持つ彼女に。

OPENING

高校二年生にへと進級する前のわずかな執行猶予。つまるところが春休み。

その日は素晴らしく天気が良かった。

空は高く見事に快晴。白雲千載とはよく言ったもので、空では呑気に雲が棚引いていた。空気は文句なしに静謐で、僕の頬を撫でる柔らかな風は、にわかには春の息吹きを感じさせた。

それは平和で怠惰な、ありふれた日常の1コマ。

実に心地の良いものである。

ぼかぼかとした春の陽気を体一杯に感じながら、思わず伸びをする。

関節がパキパキと音を立てて、僕の日頃の運動不足を如実に現していた。ちようどもうすぐ新学期だ、これを機に何か部活にでも入って少し運動を試してみるのもいいかもしれない。

健康のためにも切実にそう思った。

さて。それにしても学生というのは、つくづく貴重な特権階級であると言わざるを得ない。

程よく発展した市街地。忙しそうにせわしなく往来を行き来する社会人を横目に、僕は小さく肩をすくめる。

こんなにも天気の良い日だというのに、それに気づきもせずに通り過ぎていく。何とも勿体無い話ではないか。そして季節を楽しむ余裕がないというのは、何とも寂しい話だ。

特に何をするでもなく暇を持て余し、季節を楽しむ余裕があるのは学生くらいのものだろうか。

僕もあと何年後かには、このように風流に心を傾ける暇もない人間に、この雑踏の中の一人になってしまうのだろうか。

季節は移り、時代は流れ行くけれど。どうか僕という人間だけは

変わらずあり続けたい。

そんな少々爺臭いことを考えながら干渉に浸ってみる。僕が考えていることは所詮、世間を知らないガキの青臭い戯言でしかないだろう。だけどそれは一番大事なことのようにも思えるのだ。

春風は雑多な人の間をすり抜けて、まるで世界がどう動いていようと意にも介さないように悠々自適に通り過ぎていく。

それは僕が思い描く理想の姿だった。常にいついかなる時も、臨機応変で自由奔放な風のようにありたいものだ。

暖かな日差しと、繰り返す人波に揉まれて、汗が頬を伝った。長袖のシャツを着て来たのがそもそもの間違いだったのかもしれない。少し暑くなってきたようだ。

今まで感じてきた良い天気というのも、こうなってしまうえばもはや無用の長物。否、悪いのは天気ではない。

この人混みが暑さの原因であることは想像に難くない。

「どこかで涼むとするかな」

あまりにも天気が良かったので散歩に出た。ただそれだけの理由だった。

そして別段特別な理由があつて市街地へと足を運んだのではなく、それもまたただの気紛れだった。

だからこれは偶然なのか。

はたまた必然なのか。

避暑地を求めて、とりあえず雑多な人混みの中から抜け出そうと、信号待ちをしていたとき。

僕は、見てしまったのだ。

——僕と全く同じ姿を持つ人間に。

目。鼻。口。顎。頬。

どれをとつても同じ、毎朝鏡で見ている自分の顔そのもの。

肌の色も。髪の色も。瞳の色も。

全部同じだ。似ているのではない、同じなのだ。

唯一の違いがあるとすれば、おそらくそれは性別くらいか。僕の瞳に映る人物は、どう控え目に見ても女性だった。身長は男である僕よりも少し低いようだし、髪は長くポニーテールにしているようだった。

けれどそれ以外は寸分変わらず、完膚なきまでに、圧倒的なほどに、ソレは完全無欠に僕そのものだった。

これでは、これではまるで……。

「まるで、ドッペルゲンガーじゃないか」

意識はしていなかった。

気がつけば僕の口から零れ落ちていた言の葉。しかしそれは実に正鵠を射た表現であると、我ながらに思った。

その言葉を始めて聞いたのはいつの頃だろう。

世界には自分と同じ姿を持つ人間がいると言われて、それに出会ってしまふと不吉なことが起こるという。

それがドッペルゲンガーという存在。

いつか誰かから聞いた話だった。願わくば僕の聞き違いであることを、神様に祈る。

「！」

道路を挟んで正面。

同じく信号待ちをしていたのであろう彼女は、僕の食い入るような視線に気づいたのか、それとも何ともしなしに見たのか。

それは判別のつかないことだが、ともかくあちらも僕の存在に気付いたようだった。

バツチリと目が合った。

彼女は驚愕の表情で目を見開き、口をパクパクと開閉しながら僕を見ている。

何とも失礼な反応だな、おい。

そう思ったけれどたぶん僕も同じようなことをしているはずだ。声にならぬ叫びをあげながらお互いに見つめ合う。

たびたびその間を車が走り抜けて行くが、そんなものは気にもならない。まるで時が止まったようだった。世界から僕と彼女の時間だけを切り取られたような、そんな感覚。

端的に言えば、完全なフリーズ状態だった。

これは刹那の邂逅で運命のイタズラ。もっと欲を言えば、僕の間違いで、もしくは夢オチであって欲しいと思う。

けれどどうやらこの嘘のような現実は誠のようだ。

信号機が青になった。今まで止まっていた時間は突然動き出して、今まで彫像よろしく立っていた周りの人間も、忙しそうに再び社会の歯車にへと組み込まれていく。

一瞬にして人で溢れかえるスクランブル交差点。

人波に吞まれて、もみくちゃにされる。ぼうつと立ち尽くしていた僕は、せわしなく動く人達にぶつかり、そして流される。

再び信号機が赤になり、人の波も静けさを取り戻したときには、彼女の姿はすでにそこになかった。

慌てて辺りを見回すも発見することはできない。

あれは一体全体何だったのだろうか？

春の陽気に当てられて僕が見た、白昼夢なのだろうか。

そうだとすれば。

そうではないとすれば。

「……考えるだけ無駄だな」

白昼夢ではないとしても、人の出会いは一期一会だと言うではな

いか。よほどの巡り合わせでもない限り、次にまた彼女に会うこともないだろう。

そう、よほどの巡り合わせでもない限り。

だからもう今日は家に帰ろうと思った。歩いた距離こそ大したものではないが、何やらどつと疲れた。こんな日は何か甘美なものでも食べて、今日一日の疲れを払拭したいものだ。

「さて、ケーキでも買って帰ろうか……」

僕は柔らかな日差しの中、来た道を引き返しながら、そんなことを考えるのだった。

第1話 君は転校生!?

朝、とてつもないだるさと共に僕は起き上がった。その理由はもちろん、

「眠れなかった・・・」

昨日あんなのを見ちゃったから、不安で不安で眠れるわけないだろ！！

これで寝れる人なんていないでしょ？もしいたら僕に教えて、100円上げるから。

はあ、自分で言ってる虚しい・・・。

どうも、こんな低いテンションですいません。あさくら しんや 朝倉真也です。ちなみに高校二年生でピチピチの16歳です。

実は僕、昨日、ドッペルゲンガーに会ってしまいました。

いやゝ、本当にそっくりなんです。びっくりですよゝ、ハッハッハ、はあゝ。

「つまらないこと言ってないで、さっさと学校行こ。」

クローゼットの中にあったしわ一つない制服を着て、カバンを持つと僕は一階にあるリビングへと向かった。

リビングで朝食を食べ、顔を洗い、玄関へ向かう。

「行ってきます。」

まあ、僕の家族構成は後ほど。

「はあ。」

これで、ため息何回目かな？確か、ため息の数だけ幸せが逃げるとかどつかのオールバックのおばさんの占い師が言ってたな。

「よっ、真也！！」

力一杯背中を叩かれた僕は軽くよろめきながらもその叩いてきたやつを睨む。

「痛いよ、祐一^{ゆういち}。」

こいつの名前は佐藤 祐一。バカ、以上。

「おい、ちゃんと紹介しろよ！！例えば、この俺の素晴らしいルックスとかな。」

全くない前髪をかきあげる真似をする祐一に哀れみの視線を送ってやる。（ちなみに祐一は坊主に近いショートヘアです）

「はいはい。」

「なんだよ、今日はいつも以上にテンションが低いな。何かあったか？」

「別に、なにもないけど。」

「いや、その顔は何かある顔だ。」

さすがは親友というだけはある。

「実はね、・・・」

僕は昨日のことを話した。

「というわけなんだ。どう思う？ん？祐一？」

見ると、うつむいた祐一の肩が震えているのに気づいた。

まさか、こいつ僕のために泣いてくれているのか？

すると、祐一は僕の肩をがっしりと掴んだ。

「ゆ、祐・・・」

「ぶっ、あっはっはっはっ。ウケるわ。確か、ドッペルゲンガーって会ったら死ぬんじゃない？」

ドンマイ。」

「・・・」

こいつにそんな優しい言葉を期待した僕が馬鹿だった。

まだ、爆笑している祐一を見て、久しぶりに殺意が湧いて来た。

「僕じゃない、祐一が悪いんだよ？」

「へっ？えっ？あつ、そのつ。」

「死ね、バカが！！」

「ギャアアアアア！！」

10分後

僕と祐一はなんとか遅刻することなく教室にたどりついた。

「全く、祐一のせいで送れるところだったじゃないか。」

「ばい、すいません。」

クラス分けでは、なぜかまたこの祐一バカと同じクラスだった。

「まあ、いつか。僕の席はつと。」

黒板に張つてある座席表を見ると、窓際一番後ろだった。

「えっ！？」

僕の名字、『朝倉』だよ？なんで『あ』から始まるのに出席番号が5番？

僕の上の4人の名前を見ると、

青木

青柳

赤木

赤城

うん、とてもカラフルだね。

とりあえず、席に着こうかな。

荷物を指定された席におくと同時に聞き慣れた声が僕の耳に飛び込んできた。

「また同じだな、真也。」

「君もか、慶作。」

彼は長谷部慶作はせべ僕の数少ない親友の1人。ちなみに銀縁メガネで、学力は今のところ全て1位。結構モテモテ。

「君もか、とは心外だな。あの祐一バカと同格に扱わないで貰えるか？」

「バカバカいうな〜!!」

チャイムがなるまで僕達はたわいもない会話を楽しんだ。

「・・・であるからして、スタートは重要なのです。皆さん、これから共に頑張りましょう。」

相変わらず校長の話は長いな。おつ、今日は最長の35分58秒か。

よくもまああんなに長く話せるよね。ある意味感動だよ。

校長の無駄に長い話が終わり、教室に戻ると昨年同様、担任の堀川（男）、担当は数B（男）が高い声で話し始めた。

「はい、いいか。重要な話だぞ。」

新たなクラスメートと楽しく話していた生徒達の視線が集まったのを確認すると口を開いた。

「今日は転校生が来てるぞ。男子、喜べ。転校生は女子だぞ。」

「うおおおおお!!」

堀川は、真也、慶作など一部を除いた男子が、叫ぶのを満足げに

見て頷く。　なんで満足げなんだよ。

「はい、いいか。それじゃあ、入ってきて貰えるかな。」
ガラガラ

扉を開けて入ってきた少女をみた瞬間、クラスメート全員の視線が僕に向けられたのを感じた。

向けられた僕はというと口を開けたまま、その娘から目を離せなかった。

その娘はぺこりと頭を下げると笑顔を浮かべた。

えのもと なつき
「榎本夏希です。よろしくお願いします。」

その娘は、昨日僕が会ったドツペルゲンガーだった。

「!？」

どうやら彼女も気づいたみたいだ。目は泳ぎ、口は金魚みたいにパクパクしている。

「え、それじゃあ榎本は朝倉の横な。窓側から2列目、一番後ろな。」

まじで!？

ふと、横を見ると見事に席が空いていた。

「あ、はい。」

夏希が席に座ったのを確認すると堀川は連絡事項を告げ始めた。
もちろん、僕にそれを聞く余裕はなかった。

おそらく、彼女もだろう。

お互い、気まずい雰囲気のまま、新年度初日が終了した。

第2話 君は母親。

その日、僕が家に戻ってきたのは、昼過ぎのことだった。

太陽は今まさに天頂に達して、柔らかな光が世界に降り注いでいた。

平時と比べると随分と早い帰宅である。しかしそれもそのはず、今日は始業式だけだったので学校は午前中のみとなっていた。

もっともその後も部活動に励む生徒はいるのだが、如何せん部活動に所属していない僕には関係のない話だった。放課後になればさっさと帰宅するのが常である。鍵を開けると、息を切らして家の中に上がり込む。ただいまの挨拶もそこに靴を脱ぎ捨てると、リビングにへと駆け込んだ。

「母さん、いる!？」

ドアを勢いよく開けて肩で息をする僕を見て、ソファに腰掛けてテレビを見ていた母が少し小首を傾げてみせた。

「おや、お帰りなさい、真也くん。今日は随分と早いんだね」

ぽやんとした母の声。

息子が切羽詰まった様子で帰宅したというのに、この緊張感のなさには些か不安を覚える。

とは言え、母のこの性分も今更の話ではあるのだが。

「学校、今日は半ドンだったから」

「なるほど。それで帰りが早かったというわけだね？」

納得した様子でポンと手を打つ母。

学生とは実に良いご身分だ、などと茶を啜ると改めて僕に向き直った。

人差し指を一本ぴつと立てると、母はたしなめるような口調で、まずは手を洗ってこいと僕に言った。

どんなに僕が切羽詰まった様子であろうと、そんなことはまるで母には関係がないようで。家に帰れば一番に手洗い、うがいというのは我が家の絶対遵守の家訓である。

全く、いつまで経っても僕は母に勝てそうにない。そんなことを実感する穏やかな午後のことだった。

さて。手も洗い、ついでに私服に着替えた僕は、母の対面側のソファに深く腰を掛けてお茶を啜っていた。

苦味のきいた濃いめの日本茶はやたら美味しかった。心が和む暖かな味わいは、勢い込んでいた僕を落ち着かせるには充分なものだった。

お茶請けに出された羊羹を一口サイズに切り分けているとき、まったりとした声で母が呼びかけた。

「真也くん、さっきはとても慌てていたみたいだけど、一体どうかしたのかな？」

そう言って一口。母は羊羹を口に放り込む。それがよほど美味しかったのか、みるみるうちに母の顔が綻んだ。

僕はお茶で喉を潤すと、すっかり忘れてしまっていた用件をようやく思い出した。

気がつけば母の持つ独特の雰囲気は吞まれて、一緒にまったりとお茶をしまっていたのだ。そんな場合ではなかったというのに。

これだから僕は天然な人間が苦手なのだ。

「うん、少し気になることがあってさ。それで母さんに訊きたいことが些か」

そう言っ僕も羊羹を一口。甘美で魅惑的な味わいが口の中に広がり、一瞬で頬が緩む。

なるほど、これは確かにうまかった。苦めのお茶とよく合う。

口の中のものを咀嚼してしまうと、再び口を開いた。

「あのさ、僕に双子とかいないよね……？」

いきなりな僕の突拍子もない質問に、母はわけが分からないといったふういきよんと首を傾げる。

「真也くんは双子はいないけれど？」

当然だ、いてもらっては困る。

自分で質問をしておいて何だが、僕はその返答にホッと一息を吐く。

「じゃあ次の質問。僕に異母兄弟とかっている？」

僕がそう言ったとき、ピクリと母の眉が跳ねた。

そりゃそうだ。異母兄弟というからには父が浮気をする、つまり他の女性と関わりを持って生まれた子供ということなのだから、その言葉を母が快く思うはずもない。

言ってしまった後に、やってしまった、と密かに冷や汗を流したがどうやら首の皮一枚で助かったらしい。本当に母がおおらかな人で良かった。

「さて、あの人が浮気でもしていない限り、真也くんは異母兄弟なんていないのではないかな？ それともあの人が浮気でもしているのかな？」

怖い顔の母にじろりとねめつけられて、僕は慌てて首を横に振った。それはもう首がとれるのではないかというくらいに首を振った。そしてしばらくジトツとした目で僕を見つめていた母だが、ようやく納得してもらえたようで、いつものように柔和に微笑んでくれた。

普段は温厚な母だが父のこと……もつと露骨に言ってしまうば、父の女性関係のことになると嘘のように人が変わる。

実に迂闊な発言だった。もつと婉曲な言い回しを使った方が良かったのかもしれないが、けれど生憎と僕はそのような語彙力は持ち合わせていない。

母の心証を悪くしてしまったかもしれないと、変な汗をかきながらちらりと一瞥をする。見た目はいつも通り至極穏やかなものに戻ったが、内心はまだ穏やかではないだろう。

これからする発言はさっきの輪をかけて危険かもしれない。下手を打てば命すら失いかねない。それを覚悟した上で僕は訊かなければならないのだ。

「……母さん。隠し子なんていない、よね？」

とうとう言ってしまった。

「それはあれかな、真也くん。私にケンカを売っているのかな？」

「……滅相もないです。そんなつもりは」

「ちょっと悪ふざけが過ぎるのではないかな？ 流石のお母さんも怒っちゃうぞ？」

ピキリと母の血管が浮き上がる。背後からは不可視の暗黒オーラを大量に排出していて、大気を震わせていた。

まあ、そりゃ唐突に隠し子とか言われてもな。当然、この反応だろう。

あー…、僕って生命保険に入ってたっけかな？

振り下ろされた拳骨が宙を舞い、僕の頭頂部にへと飛来した。一瞬で視界が白く弾けて、頭上をチカチカと星が旋回する。

比喻ではない。マジで頭が割れるかと思った。

しかし自殺志願者でもない限り、こんな質問は親に向けてはしないだろう。

特に我が家の場合は母がこういった話には異常に敏感なのだ、よほどの事情がない限りはこんな愚かすぎる行為は誰もしない。

そう、つまり鉄拳を食らってまで僕が愚かな行為を体現したのは、よほどの事情があったからに他ならなかった。

「じゃあさ、親戚の中に榎本夏希って女の子はいるかな？」

よほどの事情とは僕のドッペルゲンガーこと榎本夏希のことだった。もっとも向こうからすれば、僕がドッペルゲンガーということになるのかもしれないけれど、些末なことは気にしない。

ともかく、あれほどまでに似ているのだから血の繋がりがある縁者か何かかと考えたわけだ。

一番しっくりきそうな答えだったのは一卵性の双子という線だが、それは真っ先に否定された。次に異母兄弟、隠し子とあたってみたけれど、どれもハズレ。最後には鉄拳まで貰う始末である。

朝倉家には姉と僕と妹の三人しか子供はいないと断言されてしまった。

「親戚に？ そんな名前聞いたことはないけれど……」

どうやら親戚縁者の中にも彼女はいないらしい。

いよいよ持つてわけが分からなくなってきた。こうなると血のつながりは一切ないことになる。

にもかかわらず、あれほどまでに僕と似ている。正直に言つと、姉や妹よりも遥かに僕に似ていた。

他人の空似だとか、世界に同じ顔を持つ人間が三人はいるだとかそんな言葉は数あれど、遺伝学的に考察したとしても不自然としか言いようがない。どんな偶然だとツツコミたいところである。

そして僕は誰にツツコミを入れればいいのだろうか。

「ふふふ。それにしても真也くんが女の子のお話をするなんて珍しいことだね。そのこのことが好きなのかな？」

嫣然とした笑いを含みつつ、青春だねと母が呟いた。

けれど僕が榎本夏希に恋をすることなど有り得ないと思う。今日初めて名前を知ったばかりで出会って日も浅いが、間違いなくそう断言できた。

僕と全く同じ容姿を持つ彼女を好きになる。

これではまるでナルシストではないか。だからこればかりは有り得ないことなのだ。

お茶を飲み干してしまつと、春休みの最終日のことと、今日の学校でのことを掻い摘んで話をした。

「……真也くんと同じ顔？ それはとても興味深いなあ、是非とも謁見したいものだね」

話を聞き終えた母はそんな呑気なことを口にした。おそらくは姉

や妹に話をしても、同じような反応が返ってくるのだらうと想像して、思わず嘆息を吐く。

ドッペルゲンガーに会うと死ぬなどと祐一のやつに吹き込まれて、僕は戦々恐々としているというのに、全く持って薄情なものである。この家で僕の味方は父だけだろう。

「あ、そうだ、真也くん」

不意に母が何か名案でも思いついたかのように手を打った。

「何、母さん？」

「榎本さんを一度見てみたいので、うちに招いて一緒にお食事というのはどうかな？」

にこにこ人懐っこい笑みを浮かべて母はそう提案した。さも名案だと言わんばかりに嬉々とした様子だが、それは間違いなく迷案だと思う。さもなければそれは妙案だった。

……それだけは勘弁してくれ。

そして僕は長い溜め息とともに天井を仰ぎ見るのだった。

第3話 君に聞けなくて

次の日の朝、昨日の不謹慎な発言がまだ尾を引いているのかどうかは知らないけど、ちよつとご機嫌斜めな母さんの声を背に家を出た。

「はあ、結局分からなかったな。あれだけのリスクを侵したのに。」

もう家を出てから何度ため息をついたのか覚えてないくらいため息をついている・・・気がする。

はあはあ、うるさい？

覚悟を決めて母さんに禁止ワードを使つて、命がけで聞いたんだよ！？ 閻魔大王も真つ青の怒気を放たれてたのを耐えたんだよ！？
なのに収穫無しって、そりゃあ、ため息ぐらいでるだろうが！！

「おうおう、朝から元気だね。」

この声は！？

振り返ると案の定、祐一サンドバッグがいた。

「やあ、心の友よ！！」

僕は腕を思いっきり開いて祐一に近づく。

「えっ。な、なに？どしたの？」

若干引き気味の祐一の肩をがっちりと掴む。

「僕らは親友だよね？」

「あ、ああ。なんだ？今更。」

「ありがとう。これで、なんのためらいもなくやれる！！」

「へっ？やるつて何を、ギヤアアアア！！」

辺りに祐一の悲鳴が木霊したのは言うまでもない。

「俺って、こういうキャラなの？」
何か言った気がするが無視しよう。

しばらくして、僕と腹を抱えた祐一は教室の中へと足を踏み入れた。

「2日連続で負傷して登校ってどうよ？」

「あれっ？けがしてたっけ？」

「お前がさせたんだろぅが！！」

「まっ、いいじゃん。祐一だし。」

「お前なあ。」

祐一とのバカ話を一度切り上げ、自分の席へと向かう。
横を見るとすでに夏希がいるのが目に入った。

色々と話したいけどな、話しかけづらいよな。

ん？ヘタレ？すいませんね、僕はあまり女子と話したことがないんですよ！！

なんか今日はキレてばっかだな。

ま、とりあえず座るか。

うう、居づらい。

なんか、ちらちらこちらを見てらっしゃる。

そんなに気になるなら話しかけて。もしかして僕と同じく口下手ですか？

これは話しかけてこいよということなのですか？

いや待て待て、もしこれで間違えてみる。一年間変人扱い確定だぞ？
どうするよ、僕、どうする？

ライフカードが今とても欲しい。

不穏な空気を出すそっくりさんな2人にクラスメートも声をかけられず、そのまま早くも一週間が過ぎようとしていた。

第4話 君はとなり

微かな振動を感じた。

バスの窓の外を見てみると、徐々に緑が広がりつつある。道路も狭まっていき、交通量も少なくなってきた。

アスファルトよりも緑の比率が大きくなってきたあたり、目的地まであと僅かだとみて問題はないだろう。

順調にバスは山の麓へと向かっているようだった。

そして今回の目的地というのは、ずばり山。ハイキングだった。

高校生にもなって、なぜハイキングをせにやなんのかと甚だ疑問ではあるが、校長曰わく『自然との調和の中で、学友との親睦を深める』というのが目的らしい。

かくして春の校外学習は山でハイキングと相成ったわけである。

「……………」

そう、今日は校外学習だった。端的に言えば遠足だ。

この歳になれば流石に校外学習ごときで浮かれるのは非常に恥ずかしいが、それでも心踊るイベントには相違なかった。

それを裏付けるかのように、僕から少し離れた座席の方からは祐一の笑い声も聞こえる。相も変わらず愉快的な奴である。

けれどそんな賑やかな雰囲気とは裏腹に、僕の座席は通夜のように静まり返っていた。

一種の異様な雰囲気を感じとってか、誰もこちらに寄り付こうともしない。

「……………」

ちらりと隣の座席を見る。

明らかに挙動不審な女子生徒の姿が目映った。

や、挙動不審だと言つのなら僕もそうかもしれない。

とにかくにも、通夜の原因の一端は彼女――榎本夏希にあるのは確かなのである。

さつきからお互いの様子を横目で確認しては目を逸らすという行為を繰り返している。これではまるで中学生の初デート状態だった。

……うあ、気まずい。

実のところ、彼女に訊きたいことは山ほどあった。おそらく彼女もあるはずだ。

しかし何と切り出せばいいのやら、皆目見当もつかない。

そもそもがクラス替えをしたばかりの生徒間の親睦を深めるための校外学習なのだ。思いきって切り出せばいいのかもしれない。

けれどなかなかそれが出来ずにいるのだった。

「……まあ、幸いにも時間はまだある。機会を見計らって訊いてみよう」

なんせ校外学習の班活動は彼女と同じなのだから。

小さく呟くと嘆息を一つ吐く。

僕と彼女が同じ班というあたり、何か作為的なものを感じるが、今更後悔後の祭り。

少しだけ過去のことを思い出して、僕はもう一度嘆息を吐いた。

それは今から3日ほど前のことである。

朝の一限目、ホームルームの時間のことだった。

その日は大変お日柄も良く、開け放たれた窓から入る風が肌心地よかった。

風に揺れるカーテンを視界の端に捉えながら、うつらうつらと舟を漕ぐ。

やけに眠たかった。ここ最近はろくに眠っていたのだから無理もない。学年が一つ上がったことによる新生活の疲れと、最近の一番の心労のタネであるドッペルゲンガー問題。

担任の堀川の声を聞き流しながら、夢の世界へと旅立つ。

そしてそれがいけなかった。

「……え、マジ？」

どうやら僕はすっかりと眠りこけていたようで、目を覚ましたのは一限終了の数分前。

起きて黒板を見た僕は硬直した。

この時間はきたる校外学習のために色々な取り決めを行うとは聞いていた。けれど寝ている間に決められているとは全くもって予想外。

そつと隣の席を見て、もう一度黒板を凝視する。

「……誰の陰謀だ」

基本的には校外学習というのは五、六人の班単位で行動をとにする。

そして誰の陰謀かは知らないが、同じ班には榎本夏樹の名前が確かにあった。

ついでバスの座席表。僕の隣の席はもはや言わずもがな、やはり榎本夏樹である。

……や、マジで誰の陰謀だ。

唯一の救いと言えば、慶作が同じ班であるということ。彼が班長ならば安心できる。祐一の奴は幸運なことに別の班だった。

「あー、今回の校外学習では原則として班活動だ。班員同士お互いに助け合い、親睦を深めること」

注意事項を一通り確認した後、堀川はそう締めくくった。そして今度はこちらを見て偽悪的に口元を歪めて笑った。つてか、なぜ僕を見る？

「うん、普段話せない相手と話す良い機会だ。分かったか、朝倉？」

なるほど、よく分かった。

とりあえず堀川の陰謀だということは理解した。

僕と榎本夏樹が何だか気まずい感じだと察知してのことだろう。生徒間の事情を見抜くあたり存外に優秀な教師なのかもしれない。ともかく。堀川の言う通り考えようによつてはこれはチャンスだ。せつかくのチャンス、活かさない手はない。

僕はそう決意を固めて、今日に至るのだった。

第5話 バスと君と（前書き）

今回は一号のターン

第5話 バスと君と

とまあ、そんなことがあって今はバスに揺られているんだけど。それにしても堀川め、後でワザとぶつかってメガネをドブに落としてやるからな！！

おつといけないいけない。b e c o o lだ僕。

そうだ。こういう時こそ景色を見るんだ。せつかくこんなところまで来たんだから見なきゃ損だ。絶対損だ。

そう思っ窓の方へ顔を向けてから気づいた。

僕が座っているのは通路側、つまり窓顔を見るということは隣の人即ち彼女の方へ顔を向けることになるということに。

じー

しかもなぜかナイスタイミングでこっちを見ていた彼女とバッチリ視線が合ってしまった。

は、離せない。離してくれない。

「はい、いいか」

さすがにこれはキツイと思い口を開こうとした瞬間、スピーカーから堀川の声が流れた。

2人揃って前へ視線を向けると堀川がマイクを手に通路に立ち上がっていた。

ナイス堀川。さっきのはなしにしてあげるよ。

「えゝ、バスが着いてからの動きを説明するぞ。」

僕は心の中でニヤリとしながらいそいそとバックからしおりを取り出し、それに目を落とした。

堀川の説明が終わったところにはすでにバスは駐車場に止まっていた。

僕はバレないようにiPodを制服の内ポケットに入れ、バスを降りた。

狭い空間で長時間過ごした僕の体は、伸びをするとボキボキと鈍い音を奏でた。

いつもの僕ならその音に顔をしかめたはず。けど今は違う。

今の僕はとても爽やかな笑顔を浮かべているに違いない。

だってあの拷問のような空気から解放されたんだよ？嬉しいに決まってるじゃないか。

「一人で笑ってるなんて、変態みたいだぞ。」

「君だけには言われたくないよ、祐一。」

肩に回してきた腕にとりあえず手刀を決めておく。

「ぐはあー!!」

右手を押さえうずくまる祐一を尻目に僕は整列した。

「・・・以上が注意事項だ。質問はありますか？」

頭にデルタ地帯を持つ学年主任の先生の話も終わり僕は立ち上がった。

「ああ、そうそう。ちゃんと決められた班ごとに行動するようにな。」

「その言葉に僕は立ち上がる途中で固まってしまった。」

忘れていた、僕の班には彼女がいることを・・・。

どうする？どうするよ？

僕はライフカードを取り出しカードを見る。

しかしすぐに僕の手からライフカードが全て盗られてしまった。

誰だ？そんな暴挙をするのは。

「はい、不要物だな、没収。」

堀川くくく！！！！！！

「こんなの頼らず、頑張れよ。」

何が、頑張れよ、だよ！？何を頑張ればいいの？

そんなことを考えているうちに堀川は遙か彼方。

ていうか、あいつすごい嬉しそうじゃなかった？

第5話 バスと君と（後書き）

次は2号だ。

第6話 君はパニック（前書き）

次は二号のターンっすよ

第6話 君はパニック

春。4月の下旬。

校外学習があと一週間早ければ、満開の桜が見られたかもしれない。それはさぞや華やいでいたであろう。

すっかりと散ってしまった桜の花びらを踏みしめて歩く。山道はなかなかこたえるものがある。

……や、たんに僕の体力がないだけか。

「ふむ、頂上まではほぼ一本道か。これならば迷う心配もなさそうだな」

慶作は地図を見ながら言った。

校外学習の一環とはいえ、ただのハイキングでは面白みにかける。そう考えた教員たちにより、各班には地図が一枚ずつ配られていた。それを頼りに用意されたチェックポイントを通過しながら頂上を目指す。

それが今回のハイキングの概要だ。

「はいはい！ まずは親交を深めるべく自己紹介をするべきだと思います！」

山道を歩きながら一人の少女が元気よく手を上げた。

僕らの班は合計四人で形成されている。

この少女もそのうちの一人であった。

「去年同じクラスだった人がいないんだよね。というわけで、周りには知らない人ばかりだから、自己紹介を求めます！」

「うむ、いいだろう。ただ黙々と歩き続けるだけでは面白みに欠ける。改めて自己紹介といこうか」

くいとメガネの弦をおさえながら慶作が首肯した。
いちいち仕草が絵になるやつである。

「それじゃあ、まずは言い出しっぺの私からね！ 名前は古賀ツボミ、部活は薙刀部で、趣味は内職、そんな体育会系の女の子です！」

……体育会系。

何となく分かる気がする。その元気の良さは確実に肉体労働派だ。そして趣味が内職というのはつつこんでいいのだろうか？

内職といえば、封筒の糊付けみたいなのをちまちまとやって、その対価として低賃金を戴くという例のアレだ。

一度だけ母が興味半分で行っていたのを見たが、段ボール箱の中に封筒がぎっしりだった。絶対に労働量とその賃金が見合っていないと思う。

「いやあ、内職って授業中とかの暇つぶしにはちょうどいいんだよね」

ああ、きつと古賀は勉強ができないのだろう。

恥ずかしそうに頬を掻く古賀を見て僕はそう確信した。

「では、次は俺の自己紹介だな。この班の班長を務めさせてもらっている長谷部慶作だ。特技は……まあ大したことではないのだが、学年で一番勉強ができるのと、運動神経が誰よりも良いのと、望んでもいないのに背筋が凍るほどの美形なのと、そしてなぜかモテることだ」

「うわぁ、こいつうぜえ」

よくもまあこつも自画自賛できるものだ。

確かに全て嘘偽りない正しいことだが、流石にこれは人としてどうだろう？

見ると榎本夏希も古賀も少し引いているようだった。

かくいうこの僕も引いている。条件反射的にだが、思わず親友にうぜえと言ってしまった。

だが、後悔はしていない。

だってマジでうざかったんだもん！

「それでは次は、真也の自己紹介だな」

さらりと髪をかきあげながら、慶作が言った。

素早く考えを纏めると僕は口を開く。

「僕の名前は朝倉真……」

「知ってるよ！　だって君、有名人だもん！！」

口を開こうとしたのだが、見事に古賀によって遮られてしまった。

この娘は、人の話の腰を折ってはいけないと親に教わらなかったのだろうか。おそらくは教わっていないに違いない。

「……有名人？　僕が？」

どちらかというと慎ましやかな日本人代表である僕は、目立つた覚えなどない。

いつも目立つのは他称バカの祐一と自称イケメンの慶作。それは

僕の友人たちの役目だった。

「そ、有名人。うちの学年じゃ知らない人はいないんじゃないかな？ 勿論、夏希ちゃんもね」

……なるほど、理解した。

そりゃあ同じ顔の人間がいれば否が応でも有名になる。

当然ながらに悪目立ちの部類であることは言うまでもないが。

「それで、結局どーゆー関係なのさ？ やっぱ双子とか？」

「それにしては妙だ。真也からそんな話を聞いたことはないし、二人はクラスで会話すらしていない」

よく見てるな、慶作。

思わず僕は榎本夏希と目を合わせる。

「えと、ただの他人の空似、だよな？」

「はい、おそらくは。母に聞いてみたのですが、親戚縁者に朝倉真也という人間はいないと。つまり血縁関係ではないと思います」

……おお、奇遇だな。

僕も母に同じことを聞いたよ。

やはり骨格とかも似ているのだから、思考回路も似ているのだろうか。

むう、謎である。

「でも他人の空似にしては瓜二つだよー。ドッペルゲンガーってやつかしら？」

んなわけないかー、と豪快に笑いながら古賀が言った。
だが僕たちはちっとも笑えない。

「……や、ドッペルゲンガーと会つと僕死んじやうじゃん」

「あ、私も死んじやいます。ある意味では、一蓮托生？」

確かに。そういうことなら僕と榎本夏希は運命共同体と言えなくもない。

だけど、それって一緒に死ぬってことだよな。

……なんかヤダなあ。

「きゃっ！」

突然、榎本夏希が可愛らしい叫びをあげた。

見ると彼女の肩に毛虫が付いていた。

流石は山である。

デフォルトで虫が生息しているとは……。

「ちょ、と、とってください！ 虫をはらって！」

あたふたと錯乱状態に陥り、榎本夏希は右往左往していた。

どうやら虫は苦手なようだ。

当然、僕も虫は嫌いだ。哺乳類以外とコミュニケーションをとれそつにない。

「俺も虫は無理だな。悪く思っな、榎本。……アーメン」

十字を胸の前できりながら無惨にも慶作が言った。

そしてチラリと古賀に流し目を送る。

「や、私も虫はちよつと……」

「体育会系と言ったな。ならそのくらいなんとかしてみせろ」

自分は害虫駆除を辞退しておきながら、人にはさらりと鬼畜なことを言う。

「私は体育会系である以前に女の子だ!!」

おお、古賀が吼えた。

しかし、となると誰も榎本夏希を救うことができない。
救出不可能だ。

「うにゃあああああつ!!」

なにやらネコっぽい声をあげて虫を振り落とすべく走り出す榎本夏希。

そして彼女の背中はどうどん小さくなっていく……って、ちよつと待て。

まさかとは思うが、これは……。

「……迷子つてやつか？」

班員四名、現在三名。

行方不明者、榎本夏希。

「携帯は？」

「いや、例え夏希ちゃんが持っていたとしても、私は電話番号を知らないし」

「俺も知らないな」

慶作が答えると、古賀はこちらを一瞥する。
そして、当然ながら僕も知らない。

否定の意味を込めて、僕はぶんぶんと首を横に振る。

「……そうか。となると打つ手なしだな」

班員が手分けをして捜すのは危険だ。山でバラバラになるのは迂闊すぎる。

とはいえ、彼女を一人にしておくのも危険。

ここは速やかに教員に連絡をとるべきか。

「……例えばドッペルゲンガーってさ、片方に不幸があつた場合、残されたもう一人のほうはどうなるんだろ？」

ポツリと古賀が呟いた。

残されたもう一人というのは、当然僕だ。

「そりゃあ、たぶん残されたもう一人のほうも、不幸なめに合うんだろーな」

こちらを見てにやりと慶作は笑った。

こいつ絶対に楽しんでやがるな。

……一蓮托生、か。

全くもって笑えない。榎本夏希の不幸が僕の不幸だなんて、あまりにも非科学的だ。

だけでも……。

「ちょっと僕、捜してくる」

本当に榎本夏希に何かあったら寝覚めが悪いじゃんか。
残された片割れとしては大変居心地が悪い。

僕はリュックサックを背負い直すと一目散に走り出す。

「俺たちはここで待っているから、榎本を見つけたらここに帰ってこい！」

「了解！」

慶作と古賀に軽く手を振って、僕は山道に踏み込んだ。

榎本夏希はまだそう遠くへは行っていないはずだった。
山道を走るのは困難だ。ましてやそれが女の子ならば、なおさらである。

ゆえにすぐに見つかるものと甘く考えていた。

しかし、どこを捜してもいない。

獣道を辿って歩いて来ていたのだが、いよいよもってその道すらもなくなった。

どうやらかなり山の奥へ踏み込んでしまったらしい。

「これ以上は僕も危険か……」

ミイラ取りがミイラになりかねない。

このまま奥に踏み込むと僕も迷子になってしまつたろう。

「榎本夏希っ！　いたら返事しろ！！」

とりあえず叫んではみたが応答なし。

これは一度出直して、やはり教員に報告するべきか。
僕はくるりと踵を返すと、来た道を引き返す。

と、そのとき。

「うにゃあああーっ！！」

ふと断末魔の叫び声が背後から聞こえた。

聞き覚えのある声だ。このネコっぽい声は、まさか……。

「榎本夏希かつ！？」

「ふ、ふあい！　そうです、助けてくださーいっ！！」

応答あり。

それも助けるとは相当切羽詰まった状況のようだ。

応援を呼ぶかどうか一瞬迷ったが、コンマ一秒でそれを断念する
と声のするほうへと駆け付ける。

「……いやいやいや、これはマジでありえねー」

この山は小学生も遠足で訪れるほどに安全なところだ。
まず危険な目に遭うことはない。
そう、遭うことはないはずなのに……。

「助けてください!!」

見事に榎本夏希は危機的な状況に陥っていた。

山の傾斜も厳しい、崖の切り立ったところ。岩肌もゴツゴツとしていて、とても人が踏み込めそうにもないところに、なぜか榎本夏希はいた。

そして今まさに崖から落ちようとしている。

分かりやすく言えば『ファイト―髪!』な感じである。

もはやミラクルだ。こんなにも安全な山で、どうすれば迷子になり危機的状況に直面するのだろうか？

これは一種の才能だった。

「まさに崖っぷち、か」

「そんな悠長なこと言っていないで、助けてください!」

うん、今は僕が悪かった。

冗談なんか言っている場合ではないよな。

僕はなんとかして榎本夏希の前まで辿り着いたが、どうすることもできない。

とてもじゃないが、僕の力では彼女を引っ張り上げることは不可能だろう。こんなことなら体育会系の古賀を連れてくるべきだった。

「あと、どれくらい保ちそうだ?」

僕が訊ねると榎本夏希はぴくりと顔をあげる。

「もう……無理、限界」

腕を見るとプルプルと震えていた。どうやら本当に限界のようだ。

彼女は瞳に大粒の涙を溜めていた。

試しに僕は手を伸ばしてみるが、どうだろう……。

おそらく引つ張り上げることとは無理だ。

と、そんなことを考えていると不意に榎本夏希が僕の手をがっしりと掴んだ。

「うわぁっ!？」

一瞬の浮遊感とともに、ぐんと体が宙に浮いた。

榎本夏希に引つ張られて崖の下に引きずり込まれる。

……いや、これは、マズい。

このままでは僕も彼女も死ぬ。

一蓮托生。運命共同体。

それは実に正鵠を射た表現だったようだ。

「うにゃっ!！」

とつさに僕は彼女の身体を引き寄せて、きつく抱き締める。

刹那、視界が反転した。

ぐるぐると世界が回る。いや、回っているのは僕のほうなのか。

痛みを感じる余裕もなく、僕は斜面を転がり続ける。とりあえ

ず崖の下にあった岩場ではなく、斜面のほうに落ちたのはせめてもの幸이었다。

ふとズシンと背中に鈍痛を感じた。

地面に散らばっていた枯れ葉の絨毯が僕の身を包み込んでくれた。

とはいえ、あちこち打ち身をしているようで、体を動かすとずきりと痛んだ。

「榎本夏希さん、大丈夫？」

「く、苦しいです……!!」

訊ねると苦悶の声が聞こえた。
どこか打ちつけたのだろうか？

「そろそろ、放してくれませんか……」

榎本夏希が苦しそうに僕の腕をタップした。

そこで僕ははっと気がつく。

斜面から転がり落ちる際に僕は彼女をきつく抱きしめていたのだ。
それも現在進行形で……。

「わわっ！ ごめん!!」

慌てて彼女から距離をとる。顔がかつと赤くなるのが自分でも分かった。

「ううん、大丈夫。それに、こっちこそ、ごめんなさい」

そう言うとな彼女はぺこりと頭を下げる。

心なしに彼女も顔が赤いようだが、何よりも申し訳なさそうな表情が印象的だった。

「なんで、ごめんなさい？」

「だって、私のせいでケガしちゃっているみたいですし……」

なるほど、確かに僕はケガをしている。

そしてその原因も確かに榎本夏希で間違なかった。

けれども謝られても正直困る。助けた側としても、謝られたところ

ろでちつとも嬉しくない。

「謝らなくてもいい。こういうときは、黙ってお礼だけ言うもんだ」

僕がそう伝ええると、彼女はしばしポカンとして、にこりと頷いてみせた。

「ありがとう、朝倉くん」

それは榎本夏希が初めて僕の名前を口にした瞬間だった。なんだかこそばゆいような、照れくさいような、妙な感覚だ。しかし、それにしても困ったな。

「……ここはどこだ？」

慶作と連絡をとろうにも、携帯を開くと圏外で不可能だ。

崖から落ちて現在地も分からず、もとの場所に帰れそうにない。

辺りは鬱蒼と木々がおおい茂った深い山奥。

暗くなれば危険だ。適当に道を歩き回るのも得策ではない。

「山の傾斜に沿って下山すれば、そのうち開けた場所には辿り着くはずだ。とりあえずは山から出よう」

山さえ出れば、携帯で連絡するなり、民家に駆け込むなり、どうにでもなる。

ちらりと榎本夏希を見ると、彼女は困ったような笑いを浮かべた。

「大変言いにくいんですけど、どうも足を挫いちゃったみたいで…

…」

立ち上がろうとするが、途中でふらついたように彼女はペタリと地面に座り込んだ。

これでは下山すら困難、か。

どうすっかなあー……。

僕は意味もなく空を仰ぎ見る。

空はム力つくほどに晴れ渡っていた。

山を歩く。

獣道とは言えど、道には違いない。ゆえに無理に歩けないほどではなかった。

ただ獣道というからには、それは動物たちが頻繁に移動してできた道ということだ。

僕は近くに生息しているであろう動物に気を付けて慎重に歩を進めた。

「……あの、ちょっと恥ずかしいですか？」

背中には心地の良い、柔らかな暖かみ。

僕は絶賛、榎本夏希をおぶっていた。

そのまま山の中にいても仕方がないので、おんぶして下山することにしたのだ。

「勿論、僕だって恥ずかしいに決まっている。だからそれ以上言ってくれな」

切に願う。

これ以上このことをつっこまれると、僕は恥ずかしさのあまり憤死してしまう。

歩きたびに榎本夏希がずり落ちていくので、僕はよいしょと抱え直す。

「きゃっ!？」

彼女は黄色い悲鳴をあげた。

「妙な声を出すな。僕は男だぞ、頼むからやめてくれ」

「すみません、思わず……」

思わずでそんな艶っぽい声を出されていたら、たまったものではない。

健全な男子をなめるなよ、こんにゃろっ。

「それと、榎本夏希さん。良かったら携帯の番号とメールアドレスを教えてくださいませんか？」

ふと思いついて言ってみた。

こんな機会でもなければ聞けそうにないから、勢い任せで言ってみた。

「ほら、またはぐれて迷子になられても困るから……連絡はとれたほうが良いと思ってさ」

とっさに言い訳っぽいセリフを口にする辺り僕はヘタレというやつなのだろう。

本当はそんなの後付けの理由に過ぎないのだが。
その真意に彼女は気づいたのか、榎本夏希はくすりと小さく笑った。

「教えてもいいですけど、一つだけ条件が」

はて、条件とな？

僕は小さく首を傾げる。

「ずっと疑問だったんですけど、朝倉くんって私のことをフルネームで呼びますよね？」

そう言えばそうだな。

特に意識したことはなかったが、確かに言われてみるとそうだった。

「というわけで、もっとフレンドリーな感じで名前を呼んでくださいな。それが私の交換条件です」

フレンドリーな感じとは言ってもなあ……。

ただ、名前にさん付けをするだけでは面白みに欠ける。
だいたいそれではフレンドリーとは言い難い。

榎本夏希だから……。

「略してエノキとか？」

頭に軽い衝撃。

僕がそう提案すると榎本夏希がべしりと頭を叩いた。

「それでは私がキノコの仲間入りをしちゃいます」

む、結構いい線いったと思ったのだが、やっぱり駄目か。

「じゃあ、ナッツーとか？」

「却下です。私は南国に住んでません」

ココナッツー、ってか？

それは彼女の考えすぎだろう。

少なくとも僕はそこまで考えていなかった。

「Hope of summerとか？」

「夏希だから、夏の希望ですか。英語にする意味が分かりません」

一刀両断。

ばっさりと彼女は切り捨てる。

柔らかかそうな物腰に見えて、意外と手厳しい。

これはなかなか難敵だ。

「エノもんは？」

「却下。パクリくさいです」

「なっちゃん」

「却下。あれはすごく美味しいです」

「ナツ」

「却下。普通すぎて面白くないです」

提案は片っ端からダメ出しをくらっていく。
ついに何も思いつかなくなった僕は、ここらへんで妥協してもら
うことにした。

「……なあ、もう思いつかないから、普通に夏希でいいか？ フレ
ンドリーな呼び方はまたおいおい考えるからさ」

後ろをちらりと見る。

榎本夏希はおんぶされて宙ぶらりんな足をしばらくバタバタさせ
ると、小さく唸った。

「むう、仕方ないですね。とりあえずはそれで許しましょう。それ
では朝倉くん、さっそくメアド交換です」

背中がさがそと夏希が動く気配がした。

おそらくは携帯を取り出しているのだろう。

僕も落とさないように片腕で夏希をおぶるとポケットから携帯を
取り出す。

そしてポチポチっと操作して赤外線ビームを発射。

「よし、これで登録完了っと」

僕は文句をつけられないうちに、携帯をさっさとポケットに仕舞
い込んだ。

この校外学習は収穫有りだったようだ。
少しだけ堀川に感謝。

「何て登録したんですか？ さっそく夏希って登録してくれました

か？」

「勿論だとも。ばっちりとエノキって登録したよ」

につこりと笑って僕は答えた。

これから夏希から連絡がくるたびに、ディスプレイに『エノキ』と表示されるかと思うと少し笑えた。

「だから、私はキノコじゃなあーいっ！」

夏希は声を大にして叫び声をあげる。

それは山びことなって響き渡ったという。

結局、僕と夏希が無事に山の麓ふもとに辿り着いたのは、日も暮れかけ、空も赤く染め上げられたころだった。

何というか、随分と歩いた気がする。もうクタクタであった。

だから、麓が見えてだんだんと道も緩やかになってきたときには、天にも昇る思いだった。

思いがけず足早になる。暗い山の中から次第に明るい開けた土地に。

背中の夏希もほっと安堵したようだった。

「やっと、山から抜け出した……」

降り立った地面は黒くひたすらに無機質なアスファルト。アスファルトがこんなにも恋しいのは久しぶりである。

「どうやらここは駐車場のようですね」

夏希が言った通りここは駐車場のようだ。

ほぼ手探り状態で下山してきたため、どこに出てきたのかはよく分からなかったが、何やら見覚えがあるような風景である。

そう、ちょうど目の前にあるバスだとか、その横で点呼をしている教師と学生とか、すぐく見覚えがある。

でもきつと他人の空似だ。

むしろそうであって欲しい。

「おーっ！　もしかして、朝倉ちゃんと夏希ちゃんじゃないかな！？　無事だったんだー！」

遠くから目ざとく僕らを発見した古賀にやけに似ている少女が、こつちを見てぶんぶん大きく手を振った。

その元気の良い声に反応して、何人かの生徒がこちらを見る。そして、にやけながら僕らを凝視した。

「なあ、僕、このまま逃げ出したいんだけど。今ならもう一度遭難したっていいくらいだ」

「激しく同感ですね。できれば私も逃げ出したいかも……」

間髪入れずに夏希が同意した。

それもそのはずだ。

だって学年中から好奇の視線が、一点に僕たちへと集まっているのだから。

しかも、みんな一様にニヤニヤしているし……。

「僕が女の子をおんぶしているのが、そんなに珍しいか、馬鹿やろ
おおーっ！！」

とらあえず意味もなく叫んでみた。
それは照れ隠しだという説もあるが、それはまた別の話だ。

第6話 君はパニック（後書き）

いやはや、今回は少し長くなっちゃいました><

これにて遠足編は無事終了！

やっとラブコメっぽい展開ですね笑

さて、二人の間に進展はあったのでしょうか……？

次回、乞うご期待なのです！

そして、次のターンは一号さんです♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0156i/>

僕は君で 君は僕で？

2010年10月30日20時35分発行